



障害をもつ幼児の保育(21)

—この子と出会ったとき—

津守

真 (M)

津守

房江 (F)

聴くこと・子どもの成長の中で

M 保育の中で、子どもが何を聴いているのかを知るのは、本当に難しいことです。

特に言葉で表現しない子どもから、その子に何が聞こえているのかを知ることが、保育中だけでは無理なときがあります。

子どものことを

分らないまま出会い保育する

F 初めて子どもに出会うときには、あなたは子どものことは知らないことが多いのですか。

M そうね。病院や相談所の診断や所見を持つてく
ることは多いけれど、それよりも私が直接に出会っ
たときのことや、一緒に遊んで分かったことを大事
にします。心に残ったことを記録したり思い回らす
ことを大切にしています。それでも随分長い間、記
憶や記録の中に、分からないまま保っていることが
あります。

F 分からないまま保育をするのと、分かって保育
をするのではどこが違うのでしょうか。いま、私
は幼い孫を見ることが多いのですが、若いとき分か
らないまま子どもを育てていたときには緊張感や不
安があつたけれど、その分発見の喜びも大きかった
です。いま、孫の育児にかかわるときには、不安や
緊張感が少なく、いとおしむ喜びがありますね。
M それと共通するものが愛育学園での私の保育の
中での在り方です。若い保育者の真剣さのそばで自
分も考えたり後で話しあつたりするのが、いまの私

の喜びです。

子ども自身遊びの中で本当の自分を探しているの
を、若い保育者が分からなくて真剣に考える。もし
て子どもと大人が一緒に何かを見つけて成長するの
でしょう。保育者は自分の枠を取り払って自分から
出て行く柔らかさが必要なことを、私は最近とくに
痛感しています。

F それで分かりました。

あなたが保育の基本の中で第一にあげているの
は、「出会う」ということですが、大人が自分の常
識の枠を取り払って、自分の枠から「出て」「会う」
ことですね。

「居て会う」のではだめでしょうか。(笑い) 家庭
での育児ではそんなに意識しなくても、一緒に生き
て「会う」ことをやっている。出会う基盤が出来て
いるともいえるし、出会う必要を感じなくなってい
る危険性もありますね。

M子さんとの出会い

M 以前、四年生くらいで転校してきたM子さんが、流しのところで水を出して遊んでいたのです。

初めのうちはこの子が音に敏感で、繊細な感覚をもっていることに私は気が付きませんでした。その子がままごとのお皿を何枚も重ねて、その上から水をちよろちよろと流すのを見て、わたしはなぜお皿を重ねているのか、この子どもにとつてどのような意味があるのかそのことが心に残りました。

でもよく分からなかったのです。それは「重ねる」ということに私が捕らわれていたからかもしれない。分からないまま心に抱いて長い時間がたったのかな。

後になって重なったお皿に水が流れると、音階のように柔らかな音の変化があったのかと気が付きました。

F その話はM子さんが愛育に來始めたころです

ね。その後流しに金属の洗面器を伏せておいて、そこに水を細く流して座り込んでいましたね。水の音を聴いていたのですね。

私は水琴窟のコンサートに行った時、穴の中に水がめを伏せて置き、その底に水が当たったときに出る、静かな澄んだ音をたのしむことでしたが、これはM子さんが毎日やっていることと同じだと思いました。そのコンサートで私は水の音が心を落ち着かせてくれるのを経験しました。

子どもの中に音に対する恐れや不安もあって

M でも楽しい美しい音だけでなく、恐れや不安を引き起こす音もあって、それによってパニックにな



る子どもか何人もいました。

乗り物のなかで大声で話す声や、高いキンキンした声、押し潰したような声など、どうしても我慢ができない音が、子どもによってはあるのでしょうか。ある子どもが同じクラスの子どもの声におびえることがあったときは、本当に困りました。おとなには分からないほど遠くから、嫌いな声に気が付くので、親とも何回も話し合ったこともありましたが、どちらも大切な生徒ですから……。

F M子さんの場合は、この子の好きな童謡をそばで歌うことによって、嫌いな音を和らげるようになりました。お母さんはそれを「音の煙幕」といわれましたね。だから乗り物の中などで小さな声で好きな童謡を歌ってあげると静かにしていられるのです。周りの人からもそれならそんなに迷惑がられない。

外国に行くときも好きな童謡をテープにいれて、

それをヘッドホンでききながら飛行機で過ごしたそうです。

音楽によって開かれるもの

M 愛育には音楽や造形を専門とするアートテイチャーが何人かいて、保育の中で自然なかたちで音楽を楽しんだり、絵をかいたり、物を作ったりの活動を大事にしています。M子さんも音楽の先生がくる日には、楽しんでいましたね。

F 先生の話によると、お気に入りの童謡だけでなく、モーツアルトのような曲をピアノで弾くと、流しのそばで水を流して聞いていたそうです。小学部の高学年のころはそうやってピアノの水の音との合奏が始まったようですね。

M そうそう、嫌いな音にたいしてははっきり拒否するから、穏やかに水を流しながらそばにいます。は、M子さんの心に滲みる音楽だったのでしょう

ね。小学部を卒業してしばらく外国に家族で住んでいましたが、そのころはピアノでお気に入りの童謡を自分で弾いたり、自分で作った曲を弾いて一日の大半を過ごしたそうです。二十歳のお祝いにそのピアノ曲をアレンジしてCDを作ったこともありましたね。

F M子さんのCDを作ったのは、お母さんが「自分へのご褒美」と言うようなことを話していられました。

M あれは台所の洗い物の音なども入っていて、とてもユニークなCDでしたね。

F 最近音楽の先生のとこでピアノを弾き合っていて、合奏のようにしたりしているとのことですよ。

バッハを先生が弾いたとき涙を流して泣いていたこともあるし、楽しい曲にはおかしそうに笑ってしまふときもあるそうです。音楽によって感性や感情の表現が磨かれたように思えるのです。

「もう一度幼児期に戻ったとしたら」

——お母さんの言葉

M お気に入りの童謡を繰り返し人に歌ってもらうことは、M子さんの場合、いままありますけれど、それが不安から逃れるためとか、コミュニケーションのためとかいうだけでなく、そんな中から音楽によって自分の深い思いを表現することを始めたのでしょう。

F この間、お母さんにお会いしたとき「もし二十年前に戻ったら……今度はM子の気持ちに添ってやります。以前は私の願いの方に引張ってばかりいたから」と笑いながら爽やかに話されました。

M 子どもと共にお母さんも成長されたのですね。